六郷氏・岩城氏・打越氏、由利本荘市入部400年

元和９年（１６２３年)、現在の由利本荘市に六郷・岩城・打越の三氏が入部し、令和５年（２０２３年）に４００年を迎えます。

厳しくも豊かな東北の地で、この３人の領主が幾多もの苦難を乗り越え、その努力と功績、遺産の上に現在の由利本荘市があることを忘れてはいけません。由利本荘市は、この４００年を新たな出発年とし、希望あふれる未来を創造し続けながら、世界に向けてその魅力を発信してまいります。

由利本荘市

六郷氏・岩城氏・打越氏入部の概要

戦国時代の由利地方

戦国時代、由利地方には、「由利衆」と呼ばれた１２人以上の在地領主（国人）がおり、それぞれが領地を持ち、統治していました。本荘内越地区を中心に統治し、後に矢島に入部する打越氏もその一人です。彼らは、鳥海山信仰とも相まって、鳥海山（薬師如来）の前立神（十二神将）として位置づけられ、親しみを込めて「由利十二頭」とも呼ばれています。

由利衆は、天正１８年（１５９０年）豊臣秀吉の命を受けて小田原合戦に参戦しました。同年その功として、豊臣秀吉より領地宛行の朱印状がそれぞれに下されています。これにより打越氏は、領地高１２５０石の知行を与えられ、由利衆を代表する五人衆の一人として、以後、文禄・慶長の役などへの軍役負担や、伏見城建設に係る用材として、４年に亘り杉板の負担などを行っています。

慶長５年（１６００年)、「天下分け目」と言われ、全国の大名たちの命運を決した関ヶ原合戦が起こります。合戦後徳川家康は、全国の武将にその軍功により領地を与えますが、由利衆は、関ヶ原合戦と同年同時期に起こった奥羽合戦の功などによってその処遇が決まり、他国に移封となった武将のほか、山形の最上氏や秋田の佐竹氏に仕えたり、浪人の身となった後、他氏の家臣として召し抱えられたりしました。打越氏は、常陸国行方郡新宮（現茨城県行方市新宮）に、３０００石に加増され移されました。

こうして戦国時代の由利衆体制は崩壊し、由利地方は、慶長７年（１６０２年)、加増されて５７万石の知行を与えられた山形城主最上義光の領地となりました。

江戸時代初期の由利地方

慶長７年（１６０２年)、徳川家康より庄内地方のほか、由利地方５万５０００石の知行を加増され、出羽国最大の５７万石の大名となった山形城主最上義光は、由利地域の知行地を、重臣である楯岡満茂（本城満茂）のほか、家臣であり、元由利衆の一領主であった、滝沢政道と岩屋朝繁に与え統治させました。重臣である楯岡氏の領地高は３万９０００石余りと全体の７割を占め、かつて由利衆を代表する五人衆の一人滝沢氏は１万石、岩谷氏には２４００石の知行が安堵されています。

楯岡満茂は、当初由利衆の「一ノ頭」と称された赤尾津氏の居城（岩城亀田の高城山）を根拠地としましたが、後に本城（本荘）尾崎山に城を築城し、本城満茂と名乗るようになります。滝沢政道は、由利の滝沢前郷に城と城下町を建設し、由利・西目地域を中心に統治しています。岩谷朝繁も滝沢政道と同様、戦国期に自らの領地であった大内岩谷地域を中心に統治しました。なお矢島・鳥海地域は、満茂の弟である満広に分領し、統治させています。さらに、由利地方における他の領地（塩越村・小滝村など〈現にかほ市〉）は、「源五郎蔵入」として、最上氏の直轄地としました。

慶長１９年（１６１４年）最上義光が死去すると、領内の重臣間の争いが年々激しくなり、幕府にもその情報が伝えられるほど大きな騒動へと発展します。幕府は、騒動を収拾できないとして、元和８年（１６２２年）８月、山形城主最上義俊を改易処分とし、５７万石全てを没収しました（最上騒動）。最上義俊に対し、この幕府の決定を、上使として伝えるため派遣されたのが、１５万石の宇都宮城主本多正純です。

この処分により、由利地方を統治していた本城氏、滝沢氏、岩谷氏も除封令を受けて退去することとなり、さらに破却令も出され、本城城と滝沢城は、命を受けた秋田の佐竹氏によって取り壊されました。本城氏は、処分に従い前橋藩（現群馬県前橋市）酒井家にお預けの身となりましたが、後に家臣となり３０００石を拝領しています。滝沢氏は、後に入部する六郷氏に重臣として召し抱えられ、更に後には、本荘藩の家老として藩の要職を代々務めるようになります。岩屋氏は、陸奥国三春（現福島県三春市）に赴きますが後に秋田に帰り、子孫は秋田藩佐竹氏に仕えています。

最上氏の改易処分から二ヶ月ほど後の、元和８年（１６２２年）１０月１日、上使として山形に派遣されていた宇都宮城主本多正純が、将軍徳川秀忠暗殺の疑惑をかけられ、領地１５万石没収のうえ、最上氏改易で領主を失った由利地方の領主として移封（減転封）されました。将軍が日光社参の際に宿泊する予定の宇都宮城の修復に対し、暗殺の細工を施しているとの疑惑を持たれたもので、「宇都宮城釣り天井事件」として、広く知られています。

正純は、５万５０００石の由利本城城主として移封を命じられたものの、納得できず、翌年の元和９年（１６２３年）１０月１８日、「由利５万石を固く辞してこれを受けず」として、由利領の返上を願い出ました。これにより幕府は正純を改易処分としたうえで山本郡大沢（現大仙市）に移転を命じました。正純は、後に横手で亡くなっています。

なお元和８年（１６２２年）は、最上氏改易と本多氏の移封のほか、秋田の佐竹氏が、由利領であった百三段村（現秋田市新屋・浜田・石田坂）の秋田領への編入を幕府に願い出て、認められた年でもあります。

由利本荘市は今から４００年前、こうした歴史的経緯をたどり、いよいよ六郷氏、岩城氏、打越氏による統治の時代を迎えることになります。

六郷氏・岩城氏・打越氏の入部

元和８年（１６２２年）８月、江戸幕府は、庄内のほか由利領５万５０００石を含む出羽国最大の５７万石の大名である山形城主最上義俊を、領地没収の改易処分としました。これにより、山形から庄内を経て由利地方まで、５７万石もの広大な知行地に空きが生じました。

江戸幕府は続けて、最上氏に改易決定を上使として伝えるために派遣されている１５万石の宇都宮城主本多正純を由利地方に移封（減転封）するとともに、譜代の名門である信州松代（現長野県長野市松代）１０万石の松代藩主酒井忠勝に４万石を加増し、庄内１４万石の大名として山形の鶴岡に移封しました（山形庄内藩の成立）。

また幕府は、戦国時代に角館の領主であり、関ヶ原合戦の後に４万石を与えられて常陸国松岡（現茨城県高萩市）を統治していた松岡藩主戸沢政盛に２万石を加増し、６万石の大名として山形新庄に移封しました（山形新庄藩の成立）。

翌年の元和９年（１６２３年）１０月１８日、由利に移封となり５万５０００石の統治を認められた本多正純は、この度の移封に納得いかないとして、由利領の返上を願い出ました。幕府は本多正純を改易処分にするとともに、同日の１０月１８日、由利領のうち現在の由利本荘市に、六郷氏（六郷政乗）・岩城氏（岩城吉隆）・打越氏（打越光隆）の三氏と、現在のにかほ市に、仁賀保氏（仁賀保挙誠）を移封して治めさせました

元和９年（１６２３年）由利の所領構成

仁賀保氏の領主である仁賀保挙誠は、戦国時代の由利衆を代表する領主の一人であり、関ヶ原合戦と同時期の奥羽合戦などに徳川家康の指示を受けて参戦し、その功により慶長７年（１６０２年)、常陸国武田（現茨城県行方市北浦）に５０００石の領地を受け、移りました。そして２１年後の元和９年（１６２３年）１０月１８日、さらに大坂の陣などの功が認められ、仁賀保に１万石の知行が与えられて帰郷しました。帰郷した挙誠は、常陸国での経験を活かし、商品流通や日本海交易を意識して象潟塩越を政務の拠点としました。

その後仁賀保領は、挙誠が入部した翌年に死去したことから、その遺言に従い領地をそれぞれ７０００石家、３０００石家、１０００石家に分割相続し、その後７０００石家が改易されるなど複雑な変遷を経て、寛永１７年（１６４０年)、矢島に入部する生駒氏に、その多くが引き継がれることになります。

元和９年（１６２３年）に入部したこれら領主は、統治期間にそれぞれ大きな差異がありますが、今日の由利本荘市、そしてにかほ市の礎を築きました。

六郷氏（六郷政乗）：

元和９年（１６２３年）１０月１８日、本荘藩２万石の大名として入部した六郷氏は、戦国時代、仙北郡六郷地方（現美郷町六郷）を統治していました。天正１８年（１５９０年)、領主六郷道行（政乗の父）は、豊臣秀吉の命を受けて小田原合戦に参戦し、翌天正１９年（１５９１年）１月１７日、領地宛行の朱印状が下されています。朱印状に記された知行は、４５１８石でした。

天正２０年（１５９２年)、由利衆とともに出兵した文禄の役では、朝鮮への渡海はなかったものの、肥前国名護屋城に在陣しています。

慶長５年（１６００年）関ヶ原合戦の時、道行の子六郷政乗は東軍の徳川家康方に属し、西軍の石田三成方に属していた横手の小野寺義道軍を激しく攻めたてています。合戦後の慶長７年（１６０２年）その軍功が認められ、加増されて常陸国府中（現茨城県石岡市）に一万石の知行を与えられました。常陸国府中に大名として入部した六郷政乗は、府中藩を立藩し、その初代藩主となりました。

その後六郷政乗は、慶長１９年（１６１４年）から始まる大坂の陣においても功を挙げ、元和９年（１６２３年）にさらに１万石加増され、２１年ぶりに故郷秋田に帰郷しました。

２万石の城主大名として本荘に入部した六郷政乗は、本荘藩初代藩主として、本城満茂が築城した尾崎山の本城城（現本荘公園）を政務の拠点に据えながら町の再編を行い、城郭を縮小するなど、二万石に相応しい町づくりを始めました。

六郷氏入部当時の本荘藩の領地は、石脇や松ヶ崎、平岡、赤田などを除く本荘地域の大部分と、由利・西目・東由利の全地域のほか、矢島地域の一部（向郷十か村〈坂ノ下、新庄、中山、木在等〉）や、にかほ市の一部（室沢等）にまで広がっていました。

六郷氏は、政乗を本荘藩初代藩主とし、以後第１１代藩主の政鑑が明治維新を迎えるまでの約２４０年間にわたり、新田開発や殖産振興に努め、「江戸で関とる本荘米」と称

される米の産地として、また北前船寄港地として全国の人々が行き交う物流の盛んな町づくりに努めました。由利本荘市の基礎を築いた武将の一人です。

本荘藩は藩士の教育にも力を注ぎ、「教育によるひとづくり」を進めるため、藩直営の教育機関として、藩校「修身館」を本荘城三の丸に設置し、成績優秀者には昇給や禄米を加増するなどの優遇措置を設けて激励し、本荘藩を支える有能な藩士の育成にも努めています。

岩城氏（岩城吉隆）：

元和９年（１６２３年）亀田藩２万石の大名として岩城亀田に入部した岩城氏は、戦国時代、陸奥国岩城地方（現福島県いわき市など）１２万石を統治する領主でした。また岩城氏は、天正１８年（１５９０年）小田原合戦に参戦した岩城常隆がその帰路亡くなると、常陸国の佐竹氏から領主を迎えるなど、佐竹氏と密接な同族関係にもありました。常隆の後を継いだ岩城貞隆は、後に秋田藩初代藩主となる佐竹義宣の実弟です。

佐竹義宣は、豊臣秀吉による文禄の役の朝鮮出征や伏見城の築城などに尽力し、文禄４年（１５９５年）太閤検地の結果、常陸５４万石の知行を安堵する朱印状を受けた大領主です。しかし、慶長５年（１６００年）関ヶ原合戦において自らの意思を明確に示さなかったこともあり、慶長７年（１６０２年）２０万石を与えられ、秋田に移封（減転封）となりました。

慶長５年（１６００年）の関ヶ原合戦の際、岩城貞隆は、当初東軍の徳川家康側に属したものの、実兄である佐竹義宣の命に従い、徳川家康の上杉景勝征伐に参戦しませんでした。このため、慶長７年（１６０２年）、幕府により所領１２万石が没収されました。

この処分に対し、実父の佐竹義重が岩城の名を残すため運動を行ったと記録（『義宣家譜』）にありますが、その思いは通らず、岩城貞隆は家臣とともに江戸に移り、再興の機会を図ることになります。実兄の佐竹義宣は貞隆を支援するため、秋田移封後貞隆に増田一万石（現横手市増田町、羽後町西馬音内、湯沢市稲川三梨）を与えて援助しています。

江戸に移って１２年後の慶長２０年（１６１５年）、岩城氏再興の機会がやってきます。大坂夏の陣です。岩城貞隆は本多正信（本多正純の父）の陣に属して功績を挙げ、元和２年（１６１６年）、信濃国川中島四郡の一角にある中村（現長野県下高井郡）１万石の領地を与えられ、大名となりました（信濃中村藩〈川中島藩ともいう〉）。４年後の元和６年（１６２０年）には岩城貞隆が死去し、家督は子の吉隆が継いでいます。

元和８年（１６２２年）江戸幕府は、５７万石の山形城主最上義俊の改易処分の後、空いた由利領５万５０００石に宇都宮城主本多正純を配しますが、翌年の元和９年（１６２３年）正純が返上を願い出たことから、六郷政乗、岩城吉隆、打越光隆、仁賀保挙誠の四氏に由利領移封を命じました。このうち現在の由利本荘市には、六郷氏、岩城氏、打越氏の三氏が入部しました。

移封にあたり岩城吉隆は２万石に加増され、伯父である佐竹義宣が治める秋田藩の隣、岩城亀田に入部し、亀田藩の初代藩主となりました。
亀田藩２万石の領域は、現在の岩城・大内地域を中心に、本荘地域の松ヶ崎、石脇、平岡、赤田などのほか、秋田市の下浜や雄和、大仙市の西仙北地域まで広がっています。

２万石の大名として岩城亀田に入部した岩城吉隆は、大名格式では「無城格」の身分でした。このため、高城山の北面、現在の亀田城美術館の隣地に藩の政庁舎と殿舎を整備し、「亀田陣屋」と称して、この陣屋を中心に政務に当たることになります。岩城氏が城 主格となり、陣屋を「亀田城」と称するようになるのは、幕末の嘉永５年（１８５２年）のことです。

亀田藩初代藩主岩城吉隆は、その後伯父の佐竹義宣の養子となって名を義隆と改め、秋田藩の第２代藩主になります。また亀田藩の第２代藩主には、佐竹義宣の実弟である宣隆が養子となり家督を継ぎました。

岩城吉隆は、菩提寺の龍門寺を陣屋と正対する北方に配置したり、八幡宮を松ヶ崎に配置（現松ヶ崎八幡神社）したほか、亀田陣屋を中心に城下町の整備にあたります。現在の亀田地区は、岩城氏の整備した町づくりのうえに成り立っています。

岩城氏は、吉隆を亀田藩初代藩主とし、以後第１２代藩主の隆邦が明治維新を迎えるまで、新田開発のほか、酒造業や製麺業、織物業など殖産振興に努めました。本荘藩と同様に学問の大切さを説き、藩の学館として「長 善 館」、医校として「上池館」を設置して藩士の教育にも力を注ぎました

打越氏（打越光隆）：
元和９年（１６２３年）１０月１８日、常陸国行方郡新宮（現茨城県行方市新宮）から３０００石で矢島に入部した打越氏は、戦国時代「由利衆」と呼ばれた在地領主（国人）の一人で、本荘内越地区を中心に統治していました。由利衆は、鳥海山信仰とも相まって、鳥海山（薬師如来）の前立神（十二神将）として位置づけられ、親しみを込めて「由利十二頭」とも呼ばれています。
由利衆は、天正１８年（１５９０年）豊臣秀吉の命を受けて小田原合戦に参戦し、同年その功として、豊臣秀吉より領地宛行の朱印状を受けています。打越氏には、領地高１２５０石の知行を与えられ、由利衆を代表する五人衆の一人として位置づけられ、文禄・慶長の役などへの軍役負担や、伏見城建設に係る用材として、４年に亘り杉板の負担などを行っています。

慶長５年（１６００年）の関ヶ原合戦の後、徳川家康は全国の武将にその軍功により領地を与えますが、打越氏の領主打越孫四郎は、関ヶ原合戦と同年同時期に起こった奥羽合戦において、徳川家康の命により、後に出羽国最大の５７万石の大名となる最上義光に従って上杉氏を抑え、功を挙げました。慶長７年（１６０２年）その功績が認められ、３０００石に加増されて常陸国行方郡新宮に移されます。

それから２０年後の元和８年（１６２２年)、江戸幕府は、山形城主最上義俊の改易処分を行い、その改易決定を上使として伝えるため山形に派遣された１５万石の宇都宮城主本多正純を、空いた由利領５万５０００石に移封（減転封）しますが、翌年の元和９年（１６２３年）正純が返上を願い出たことから、同年１０月１８日、幕府は空いた由利領のうち本荘に六郷政乗、岩城に岩城吉隆、仁賀保に仁賀保挙誠、そして矢島に打越光隆を移封し、この四氏により由利領を治めさせました。

矢島に入部した打越光隆は、先住地（常陸国行方郡）で縁のあった長國寺八世を開山とし、菩提寺龍源寺を開創しました。そして龍源寺の近く、現矢島小学校の位置する八森に政務を掌る陣屋を配置して矢島八森陣屋とし、政務の拠点としました。打越氏の領域は、向郷十か村〈坂ノ下、新庄、中山、木在等〉を除く矢島地域と鳥海地域です。

打越氏は、光隆の子、光久が跡継ぎのないまま死去したことから、寛永１１年（１６３４年)、入部後わずか１１年で改易となりますが、入部と同時に行った矢島の城下町づくりには、戦国時代の領地だった内越地域から多くの人々を矢島に呼び寄せ、城下の建設にあたったと伝えられています。

打越氏改易後の矢島・鳥海地域は、幕府領に編入され、寛永１７年（１６４０年）讃岐国高松（現香川県高松市）から生駒氏が矢島に入部するまで、庄内の酒井氏の預領として治められていました。なお、矢島の坂ノ下、新庄、中山、木在等の向郷十か村と東由利地域は、当初六郷氏の領地でしたが、生駒氏が入部して５年後の正保２年（１６４５年）に所 替が許され、以後矢島領として明治維新を迎えることになります。

去ること４００年前、戦国の乱世を生き抜いた六郷氏、岩城氏、打越氏は、多くの苦難を乗り越えてこの地に至り、今日私たちが生きる由利本荘市の礎を築きました。
今、４００年の節目の年を迎え、これら多くの先人の努力に感謝しながら、未来の由利本荘市を創造しましょう。はっしん！由利本荘！！